

# アメリカにおける 19世紀前半の2人の先駆的会計人 — B. F. Foster と T. Jones —

久野光朗

1841年、Thomas Jones は“Principles and Practice of Bookkeeping”と題する簿記テキストを公刊したが、その業績は簿記の論理 (bookkeeping logic) に対する鋭い洞察力を持った会計の開拓者として彼を決定づけるものである。それは同時代の人たちを遙かに凌駕し、かつ実際にはその後の多くの継承者たちをも凌ぐものであった。

(1)  
— A. C. Littleton —

## § 1 序 説

本稿は、筆者が18世紀末から19世紀前半にいたるアメリカ会計文献を検討した結果、<sup>(2)</sup> もっとも優れた業績を残したと考えられる2人の先駆的会計人、すなわち Benjamin Franklin Foster と Thomas Jones (1804—1889) の諸文献を紹介し、吟味し、かつ、いかなる点で彼らが同時代の会計人を凌駕している

原稿受領日 1980年11月11日

(1) “Thomas Jones—Pioneer,” *The Certified Public Accountant*, June 1927, p. 183.

(2) たとえば、J. A. Anderson, *The Historical Development of Bookkeeping in the First Half of the Nineteenth Century* (Unpublished Master Thesis, 1929), pp. 59のほか次の拙稿を参照されたい。

「アメリカ人による最初の複式簿記文献」『商学討究』、第25巻・第1、第2合併号 (1974年10月), pp. 47-67; 「19世紀初頭のアメリカ会計文献」『一橋論叢』、第83巻・第1号 (1980年1月), pp. 15-41.

(3)  
たかを明らかにせんとするものである。

(4)  
本稿で筆者が検討の対象とした彼らの文献は次のとおりである。

Benjamin Franklin Foster:

*A Concise Treatise on Commercial Book-keeping*;... (Boston: Perkins & Marvin, 2nd ed., 1837), pp. 200+12 (24cm).<sup>(5)</sup>

*The Merchant's Manual*,... (Boston: Perkins & Marvin, 1838), pp. 252 (24cm) — とくに Chap. 11, "Principles of Commercial Book-keeping," pp. 151—172.<sup>(6)</sup>

(3) 下記の諸文献を参照されたい。

A. C. Littleton, "Two Pioneers of Accountancy," "Thomas Jones—Pioneer," "Pioneers of Accountancy," *The Certified Public Accountant*, Feb. 1927, pp. 35-37; June 1927, pp. 183-186; July 1928, pp. 201, 202, 220. *Accounting Evolution to 1900* (N. Y. : AIA, 1933)—Rep. ed. (N. Y. : Russel and Russel, 1966), Chaps. 11, 12, pp. 165-204.

H. P. Hughes, "The Contributions of Thomas Jones and Benjamin Franklin Foster," in the *Bicentennial Edition of Collected Papers*, AAA Southeast-Regional Group, 1976, pp. 93-98.

G. J. Previts and B. D. Merino, *A History of Accounting in America* (N. Y. : John Wiley & Sons, 1979), pp. 46-51, 69.

(4) H. C. Bentley and R. S. Leonard, *Bibliography of Works on Accounting by American Authors* Vol. I (Boston : H. C. Bentley, 1934) を参照し、筆者が検討できなかった文献を示せば次のとおりである。

Foster :

*The Theory and Practice of Book-keeping*, ... (Phil. : H. Perkins, 1840), pp. 112(23×18½cm)——イギリス版 (London : J. Souter, 1840) があり、また別のアメリカ版 (Boston : T. R. Mervin, 1845) がある。

*Double Entry Elucidated*. ... (Boston : T. R. Marvin, 1852), pp. 152 (21½×17½cm).

Jones :

*Paradoxes of Debit and Credit Demolished*;... (N. Y. : J. Wiley, 1859), pp. 74(24cm).

*The Scholar's System of Book-Keeping*;... (版權登録はなされたけれども所在不明)。

(5) Bentley and Leonard, *op. cit.*, p. 21 によれば、初版は1836年であり、第8版が1853年に出版されている。久野秀男、『英米(加)古典簿記書の発展史的研究』(学習院, 1979), pp. 335-341では本書の第3版(1839)について論及している。

(6) 本書については、Jones, *The Principles*...とともに、大阪経済大学の泉谷勝美・渡辺泉両教授の厚意により、同大学所蔵のマイクロ・フィルムを貸与されたことを付記し、感謝の意を表する。

*Double Entry Elucidated*... (London: Souter and Law, 1st ed., 1843), Part I, pp.44+Part II, pp. 60+Set I, pp.31+Set II, pp. 35 + [4]—7th ed. (London: W. Aylott & Co., 1857), pp. xx+152.<sup>(7)</sup>

*The Origin and Progress of Book-Keeping*:... (London: C. H. Law, 1852), pp. 54—Rep. ed. (N. Y. : Arno Press, 1976).<sup>(8)</sup>

Thomas Jones:

*The Principles and Practice of Book-keeping*,... (N. Y.: Wiley and Putnam, 1st ed., 1841), pp. 160 (23½cm).

“Analysis of Bookkeeping as a Branch of General Education,”<sup>(9)</sup>  
*Hunt's Merchant's Magazine*, December 1842, pp. 513—526 —  
*The Accounting Historians Journal*, Vol. 4, No. 2 (Fall 1977),  
pp. 29—46に再録。

*Bookkeeping and Accountantship*,... (N. Y. : John-Wiley, 1855),  
pp. 245 + [1] (25cm).<sup>(10)</sup>

以下の論述においては、いずれの場合も、原則として冒頭に掲げた文献、Foster, *A Concise Treatise*…と Jones, *The Principles*…を中心に考察し、他の文献に関しては必要に応じて本文中の括弧もしくは脚注において言及することにする。

## § 2 B. F. Foster の簿記書

著者は、大きな商企業に記帳係として数年間奉職した経験を持ち、本書執筆

(7) 本書からも理解されるとおり、Foster は1840年代の初期にアメリカからイギリスへ移住したらしい。なお、同書は、The Institute of Chartered Accountants in England and Wales, *Historical Accounting Literature* (London: Mansell Information Publishing, Ltd., 1975), p.112によれば、15th ed. (London: George Bell & Sons, 1893) まで出版されている。久野秀男, 前掲書, pp. 49-51, 267-273では本書の初版について論及している。

(8) 久野秀男, 前掲書, pp. 273-279で論及がなされている。

(9) この雑誌は1839年にニューヨークで創刊された月刊誌で、Jonesの本論稿をはじめ簿記・会計に関する多くの論稿が掲載されている。

(10) Bentley and Leonard, *op. cit.*, p. 34によれば、本書の初版は1849年であり、1864年まで種々の版が出ている。

当時はニューヨーク商業学校 (The New York Commercial Academy)<sup>(11)</sup> に籍をおいて青年たちに簿記とともに商事要綱・習字・商業計算・書簡・通信文の指導をしていた。彼の本書執筆目的は、初心者が容易に理解できるように簡明な例示による学校向の簿記書であると同時に、実務に携わる会計人に必要な情報を提供できるような包括的な簿記書たることであった。

その序文 (p. 5) で、著者はイギリスの Morrison と Cronhelm に負うところが大きいことを謝し、また *McCulloch's Dictionary of Commerce* をも利用した旨を述べている。なかんずく、Foster の文献が Cronhelm の簿記書に依拠していることは周知の事実であり、たとえば本書の第1章、第2章、および第4章の一部は Cronhelm の簿記書の第1章、第2章、第3章、および第8章の一部である。<sup>(14)</sup>

(11) 本書の巻末 (pp. 201 - 207) に同校の趣意書が掲載されている。

(12) Foster, *The Origin...*, pp. 27 - 29によれば、彼が所有もしくは検討したと思われる James Morrison の文献は次の4冊である。

*A Complete Treatise on Practical Book-keeping*; ... (Edinburgh : 1803) ;  
*The Elements of Book-keeping* ; ... (London : 1813) ; *The Mercantile Teacher's Assistant* ; ... (London : 1829) ; *A General System of Mercantile Book-keeping* ; ... (London : 1830).

また、Charles Morrison の文献は *A Complete System of Practical Book-keeping* ; ... (Glasgow : 1814) のみである。Foster, *Double Entry...*, 7th ed. pp. ix, x の "Authors on Book-keeping" においては、先の James Morrison の文献のうち1803年と1830年のものがなく、1820年のものが掲示されている。J. Morrison, *A Complete Treatise...* (1808) については、久野秀男、前掲書、pp. 249 - 251を参照されたい。

(13) (12)で引用した Foster の2つの文献は、ともに F. W. Cronhelm, *Double Entry by Single...* (London : Longman, 1818) を掲げている。本書については、Littleton, "Pioneers of Accountancy," pp. 201, 202; *Accounting Evolution...*, pp. 167 - 170, 333 - 339 ; 久野秀男、前掲書、pp. 47, 48, 255 - 259を参照されたい。

(14) Littleton, *Accounting Evolution...*, pp. 167, 181を参照。なお、複合仕訳帳に関しては、Benjamin Booth, *A Complete System of Book-Keeping...* (London : Couchman & Fry, 1789) にも依拠しており (p. 42を参照)、そのほか期末財産の時価評価に関しては R. Hamilton, *An Introduction to Merchandise...* (Edinburgh : The Author, 1788—1st ed., 1777), 元帳勘定接近法については T. Jones にも依拠している。

さて、本書の構成は、簿記の学習方法と本書の指導方針について述べた序文 (pp. 9—16) に続いて、次のとおり11章と2つの記帳例題からなっており、さらに巻末に改良仕訳帳 (pp. 182—186)、商業用語 (187語) の解説 (pp. 187—191)、債権・債務の平均滞留期間算定方法 (pp. 192—199)、および日数計算表 (p. 200) が付されている。

- 第1章 簿記の起源と発達 (pp. 17—22)
- 第2章 複記の理論——均衡の原則 (pp. 23—29)
- 第3章 イタリア式——現代式——補助簿 (pp. 30—34)
- 第4章 元帳の説明 (pp. 35—37)
- 第5章 仕訳法則、月次仕訳の留意事項 (pp. 38—42)
- 第6章 転記と決算の指針、記帳の検証 (pp. 43—51)
- 第7章 商人会計の各種書式 (pp. 52—56)
- 第8章 月次合計仕訳法の例示 (pp. 57—65)
- 第9章 記帳の理論と実践に関する質疑応答 (pp. 66—77)
- 第10章 商取引、仕訳記入、元帳 (pp. 78—100)
- 第11章 解説と注意事項 (pp. 101—104)
- 第1セット 小売商の記帳例題 (pp. 105—129)
- 第2セット 商人会計の例題 (pp. 131—179)

第1章では、中国・ギリシャ・ローマの会計から Paciolo (1494年——原著では Cronhelm, *op. cit.*, p. xiii と同様に1495年としている)・Gottlieb (1531)・Oldcastle (1543)・Stevin (1602)・Collins (1652)・Booth (1789)・Kelly (1801)・Cronhelm (1818)にいたる簿記小史および簿記文献 (156冊、そのうちアメリカのテキスト30冊以上) の解題が簡潔になされている。かかる簿記史の考察は、すでに前述した Cronhelm の文献 (pp. x—xiv) でもなされており、また P. Kelly, *The Elements of Book-keeping*,... (London: J. Whiting, 1801) —— 10th ed. (London: C. Baldwin, 1833) の序文 (pp. iv—ix——10th ed., pp. vi—x) でも試みられている。とはいえ、それらに続く、ごく初期の簿記史研究のひとつであるといえよう。

第2章では、まず簿記を定義して、“簿記とは常に全資本 (the whole cap-

ital) の価値とその各構成部分の価値を示すように財産 (property) を記録する技法である” (pp. 23, 66 ; Cronhelm, *op. cit.*, p. 1を参照) と述べ、均衡性 (EQUALITY)こそ簿記の基本原則であるとして次のようにいう (p. 25 ; Cronhelm, *op. cit.*, pp. 4, 5<sup>(15)</sup>を参照)。

全体は部分の総和に等しいというのが精密科学の基本公理であり、複式簿記の上部構造は、まさにこの基盤に依拠している。それは財産を各種構成部分からなる全体として考察する。すなわち、資本金勘定は全資本 (the entire capital) を記録し、貨幣・商品・人名の各勘定はその構成部分を記録する。したがって、資本金勘定と他のすべての勘定との間には必然的に不変的の均衡関係が存在するはずである。

かくして、Foster は、簿記の要素を(1)利益・損失・私用の諸勘定を含む資本金勘定 (Stock Account), (2)現金・受取手形・支払手形の諸勘定を含む貨幣勘定 (Money Accounts), (3)不動産・有価証券などを含む商品勘定 (Merchandise Accounts), (4)人名勘定 (Personal Accounts) という4大要素に分類し (Cronhelm, *op. cit.*, p. 3を参照), 伝統的な人名・実在・名目 (擬制) という3分類を排している。彼はいう (p. 28 ; *Double Entry...*, 7th ed., p. 148 ; Cronhelm, *op. cit.*, p. 27を参照)。“勘定を「人名」・「実在」・「名目」に分割することは、過去においては科学的書物の尊厳を高めてきたとはいえ、もっとも馬鹿げたことのひとつである。”

第3章では、帳簿組織に言及し、伝統的なイタリア式3帳簿制に対して2帳簿制を主張し、かつ各種の補助簿を特殊仕訳帳として利用することを推奨している。すなわち、特殊仕訳帳としての機能を有する基本的補助簿として、(1)現金出納帳・(2)手形記入帳・(3)仕入帳・(4)売上帳 (委託販売をも含む)・(5)受託販売帳をあげ、さらに上記の諸帳簿に記入されない取引を記録するための当

(15) *The Merchant's Manual*, ..., pp. 159, 160, 167, 168 ; *Double Entry...*, 1st ed., p. 15 ; 7th ed., pp. 3, 4でも同趣旨の説明がなされている。これは、積極財産 [Σ貨幣勘定 + Σ商品勘定 + Σ人名勘定] - 消極財産 [Σ貨幣勘定 + Σ人名勘定] = 資本 [資本金勘定 - 私人用勘定 ± 損益] という資本等式を含意している。また *Double Entry...*, 7th ed., pp. 9 - 11, 66, 72では、期首資本 ± 損益 = 期末資本 = 期末資産 - 期末負債から資産 = 負債 + 資本という貸借対照表等式を誘導している。

座帳 (Day Book) についても説明している。また、特殊仕訳帳化されない補助簿としては(1)交互計算明細帳 (Account Current Book)・(2)書類控帳・(3)小口現金出納帳 (その合計額を月ごとに現金出納帳へ記入)・(4)注文控帳・(5)現金売上帳 (その合計額を週ごとに現金出納帳へ記入) をあげている。なお特殊仕訳帳から元帳への転記に関しては、仕訳帳が全補助簿の総括をしうるよう月に月末に仕訳帳で合計仕訳をしてから転記すべきだと主張している (p. 34)。

第4章では、先に第2章で示した4勘定分類に依拠した元帳勘定の説明がなされている。人名勘定については改めて解説するまでもないが、貨幣勘定に属する現金・受取手形・支払手形に関する貸借記入と当該勘定残高の意味を明らかにしている。商品その他の財産勘定については、まず商品勘定における販売損益算定方法、ついで船舶・家屋・土地に関して、借方記入は取得原価とともに修繕費や税金など、貸方記入は売却その他の収入と説明し、売残財産の見積価値 (estimated value) — 原価ではなくて時価 (present prices) を貸記する損益算定方法を述べている (pp. 36, 49, 51; *Double Entry*..., 7th ed., p. 37)<sup>(16)</sup>。

“資本金勘定は当該帳簿所有主を示すために使われる用語である” (p. 36) として、損益勘定の資本金勘定への振替について説明し、家事費勘定もしくは私用勘定の決算時における資本金勘定への振替、営業費・利息・手数料・保険料などの損益勘定への記入について解説したあと、損益勘定と私用勘定について次のごとく述べている (p. 37)。名目勘定が依然として軽視されていることが理解される。

損益集合勘定は資本金勘定の分枝にすぎない。その目的とするところは、後者に対する数多くの小口の記入を避け、資本の個別的増減を総括し、資本金へ総括的帰結を1回で振り替えることにある。営業費・利息・手数料などの諸勘定も当該関連項目を集計する損益集合勘定の細目にすぎず、その結果を定期的に損益集合勘定へ振り替え

(16) とくに p. 36 の説明は Hamilton, *op. cit.*, p. 285 の説明とまったく同じである。なお、Hamilton の簿記書に関しては、久野秀男、前掲書、pp. 213-222 および渡辺泉、「ロバート・ハミルトンの簿記書——第Ⅳ部イタリア式簿記を中心に——」『大阪経大論集』、第124号 (1978年7月)、pp. 65-93を参照されたい。

(17) p. 74では次のように指摘している。“私用勘定の金額もしくは家事費を損益集合勘定へ振り替える会計人もいるが、それは明らかに間違っている。”

る。私用勘定も資本金勘定の主要な分枝である。それを利用するのは私用のために事業から引き出した全金額を記録するためである。

第5章では仕訳法則を説明しているが、前章で元帳勘定の説明を先行させている点に本書の特色がある。すなわち、「借方・貸方の仕訳法則は元帳勘定の性格から推論される。「物(*things*)」についても「人(*persons*)」の場合と同様に貸借記入される。借方・貸方という用語は勘定の増減 (*the increase or decrease*) を示すために利用され、その適用は次の一般法則によって規制される」と述べ、「受け入れた物は引き渡した物に対して借方である」という一般法則を掲げ (pp. 38, 68, 103), さらに先の4勘定分類に応じて、それぞれの記入方法を説明している。借方・貸方を統計的な増減という用語で説明している点は高く評価できるが、いまだに擬人法に基づく受払説が尾をひいていることをも認めねばならない (pp. 101, 102をも参照)<sup>(19)</sup>。なお、仕訳に関しては、すでに第3章で述べたとおり、仕訳帳で各種の補助簿からの月次合計仕訳をしたあと、元帳へ転記することを推奨している。

第6章では、まず仕訳帳から元帳への転記について、いわゆる単純取引の場合と複合取引の場合に分けて説明し、後者については「諸口 (*To Sundries, By Sundries*)」を使用するとしている。ついで、勘定締切前の合計試算表作成の必要性を説き、決算手続として第1に私用勘定の資本金勘定への振替、第2に「損益表 (*Profit and Loss Sheet*)」と「残高表 (*Balance Sheet*)」の作成による期間純損益の算定と期末資本の確定手続が述べられている。いま、著者が記帳の検証と称する後者の手続を引用すれば次のとおりである (p. 49)。

すべての勘定残高を集計したら、元帳の損益集合勘定をも含めて、「損益表」を合計せよ。その貸借の「差額」は純損益であり、これに資本金勘定の「差額」を加えれば、その総額は正味資本となり、帳簿が正確に転記され、かつ勘定残高が正確に集計されているかぎり、その正味資本は「残高表」の差額と一致することになる。

(19) *Double Entry*..., 1st ed., Part I, pp. 21, 23 ; 7th ed., pp. 11, 32, 75でも同様の説明がなされている。



上記の損益表と残高表は帳簿外で作成されるものであり (p. 176参照)、独立した財務諸表としての損益計算書および貸借対照表の萌芽と考えることができる。その詳細については記帳例題を紹介するさいに後述する。損益集合勘定と残高勘定は、依然として帳簿に設定されており、上記の手続は、いわば正式な元帳決算手続に対する予備手続としての検証手段になっている。なお、損益集合勘定と残高勘定への記入は、仕訳を経由しない場合 (第1セットの記帳例題) と經由する場合 (第2セットの記帳例題) が示されており、また後者の場合でも個別転記ではなく、貸借とも諸口による合計転記になっている。

さらに、Foster は、決算にあたって留意すべき事項として、2つの注目すべき事柄を指摘している (p. 51)。そのひとつは先にも若干言及した手持財貨の時価評価であり、もうひとつは自己資本利子の費用計上である。すなわち、前者に関して“素価 (prime cost) よりも「現在価格 (present prices)」で財貨の価値を見積の方が正確であり至当である”と述べ、また後者に関して“商人は利益算定前に各投下資本の利子 (interest on each investment) を計上すべきである”と主張している。

第7章では、商人会計にとって必要な各種の書式に関する内容と様式の説明がなされている。すなわち、送り状・貨物明細書・仕切精算書・指図手形・約束手形・外国為替・交互計算明細書などである。

第8章は、第3章に関連して前述した特殊仕訳帳化される各種補助簿について、まずそれぞれ1ヵ月間にわたる個別取引の記入方法、ついで月末の仕訳帳における合計仕訳の方法を解説している。対象となっている補助簿は現金出納帳・受取手形記入帳・支払手形記入帳・仕入帳・売上帳・受託販売帳などである。

第9章は、これまで考察してきた複式簿記の理論と実践について、質疑応答の形式で総復習を試みている。すなわち、簿記の定義に始まって複記の意義、帳簿組織といった簿記原理、元帳勘定、仕訳、転記と帳簿の検証、決算、総括表と検証、商人会計などであるが、最後の組合会計 (Partnership or Com-

pany Accounts) の項では組合員勘定に対する引出額の記帳とともに持分に  
 応じた自己資本利子の計上を説き、また持分に応じた損益の分配にも言及して  
 いる。

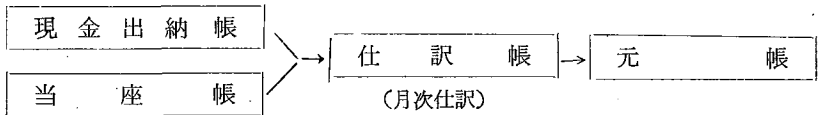
第10章は、前章における復習を記帳例題によって補強せんとするものであり、  
 後述する2つの記帳例題に対する予備的学習になっている。記帳例示は個人企  
 業を前提にした出資に始まり、1836年1月1日から同年3月31日までの取引を  
 対象にしている。使用帳簿は仕訳帳(金額1欄式)と元帳の2つだけである。  
 元帳に設定されている勘定科目は21で、そのすべてにアルファベット順の索引  
 が付されている。すなわち、資本金を筆頭に損益集合・現金・営業費・受取手  
 形・支払手形・商品・債権と債務を示す9つの人名(委託販売と受託販売によ  
 るものをも含む)・保険料・受取手数料・委託販売諸掛(委託販売勘定へ振り  
 替えられて消滅する中間勘定)・委託販売と続き、最後に残高勘定が設定され  
 ている。また、決算予備手続として決算前合計試算表も作成されている。

決算手続としての損益集合勘定および残高勘定への振替ならびに損益集合勘  
 定から資本金勘定への振替は、いずれも仕訳を経由せず、元帳勘定の間で直接  
 なされている。なお、損益集合勘定には、手形の支払割引料と売上商品の損傷  
 による値引(discount)の2つが直接記入されている。さらに、残高勘定では、  
 次に示すごとく(p. 100)、借方側に「資産(Effects)」・貸方側に「負債  
 (Debts)」の文字が見られることに留意されたい(pp. 48, 129をも参照)。

6		BALANCE.				
Dr.				Cr.		
—Effects.—				—Debts.—		
1836				1836		
Mar. 31	To Cash, . . . . .	8,198	12	Mar. 31	By Bills Payable, . . .	5,000 00
	To Bills Receivable, . . .	3,555	77		By C. Hammond, . . .	185 87
	To Merchandise, . . . . .	5,786	00		By George Smith, . . .	967 31
	To James Bruce & Co. . . . .	1,547	65			
	To James Peters, . . . . .	896	75		Am't of my debts, . . .	6,153 18
	To Buchanan & Co. . . . .	3,360	25		By Stock, net Capital, . .	17,191 36
		23,344	54			23,344 54

第11章は、仕訳法則と元帳勘定の性格について、前章の取引事例を参考にしつつ、とくに現金・商品・受取手形・支払手形の諸勘定について平易に解説している。その内容は既述した第5章と大同小異である。

第1セットの記帳例題は、個人企業の小売商を前提にした1836年1月1日から同年3月30日までの取引に関する記帳である。帳簿組織は次のとおりであるが、月次仕訳に基づく元帳への転記方法は、現金勘定と商品勘定への貸借記入のみが合計仕訳を通じて各月末の日付で行なわれ、それらの相手勘定を含む他の勘定科目は1カ月分を当該取引発生の日付（2口以上ある場合は最終の取引日）で行なっている。なお、仕訳帳は金額1欄式で、損益集合勘定および残高勘定への振替、私用勘定および損益集合勘定から資本金勘定への振替は、いずれも当該勘定の間で直接なされている（p. 128の注を参照）。



元帳に設定されている勘定科目は18で、すべてにアルファベット順の索引が付されている。その設定順序は資本金を筆頭に私用・損益集合（期中にも記入あり）・債権と債務を示す2つの人名・受取手形・預金・現金・2つの人名・支払手形・商品・営業費・4つの人名と続き、最後が残高勘定となっている。

いま元帳の次に掲げられている合計残高試算表・損益表・残高表を示せば次のとおりである（p. 129）。損益表と残高表は損益集合勘定と残高勘定から独立して作成されていることに留意されたい（p. 176をも参照）<sup>(19)</sup>。

(19) *Double Entry*..., 1st ed., Part I, p. 35, Part II, Set II, pp. 21, 46, 47; 7th ed., pp. 30, 144, 145では、損益表に「損失 (Losses)」・「利益 (Gains or Profits)」, 残高表に「資産 (Assets)」・「負債 (Liabilities)」の見出しが付されている。

Ledger Folios.	TRIAL BALANCE, March 30.	Amounts.		Differences.	
		--Drs.--	--Crs.--	--Drs.--	--Crs.--
1	Stock, . . . . .		5,000 00		5,000 00
1	Private Account, . . . . .	85 75		85 75	
1	Profit and Loss, . . . . .	8 36	15 75		7 39
1	Edward Ford, . . . . .	545 25	216 25	329 00	
2	Cash, . . . . .	11,025 80	10,414 69	611 11	
2	Bills Receivable, . . . . .	1,823 25	855 50	967 75	
2	Commercial Bank, . . . . .	5,150 00	3,931 13	1,218 87	
2	Charles Drummond, . . . . .	662 31	36 06	626 25	
3	Bills Payable, . . . . .	2,681 13	3,231 13		550 00
3	Merchandise, . . . . .	6,157 01	4,623 22	1,533 79	
3	Charges, . . . . .	331 12		331 12	
4	Aaron Brown, . . . . .	1,209 25	605 50	603 75	
4	James Andrews & Co. . . . .	1,895 63	2,645 63		750 00
		31,574 86	31,574 86	6,307 39	6,307 39

DR.		BALANCE SHEET.		CR.	
—Effects.—				—Debts.—	
To Cash, . . . . .	611 11	By Bills Payable, . . . . .		550 00	
To Bills Receivable, . . . . .	967 75	By J. Andrews & Co. . . . .		750 00	
To Commercial Bank, . . . . .	1,218 87	Amount of my debts, . . . . .		1,300 00	
To Aaron Brown, . . . . .	603 75	By Stock, net capital, . . . . .		5,556 73	
To C. Drummond, . . . . .	626 25				
To Edward Ford, . . . . .	329 00				
To Merchandise, . . . . .	2,500 00				
	6,856 73				6,856 73

DR.		PROFIT AND LOSS SHEET.		CR.	
To Sundries, P Ledger, . . . . .	8 36	By D. Evans, P Ledger, . . . . .		15 75	
To Charges, . . . . .	331 12	By Merchandise, . . . . .		966 21	
	339 48				
To Stock, gain, . . . . .	642 48				
	981 96				981 96

第2セットの記帳例題は、組合事業 (Reed, Jones & Co.) を前提にして、1836年7月1日から同年12月31日までの取引を対象にしている。組合員は3人で、うち1人 (B. F. Foster) は記帳を担当するため給料の名目で年 \$ 480が他の2人の組合員 (John Reed と Thomas Jones) から持分額に応じて支給される契約になっている。

帳簿組織ならびにその記帳関係は、学習の便を考慮して、第1セットの場合と同じにしているが、第3章その他で説明した各種補助簿との関連性を明らかにし、受取手形記入帳と支払手形記入帳に関する記帳例を示している (pp. 178, 179)。注目すべき会計処理としては、すでに第6章で言及したことであるが、決算にあたって (借方) 利息 (貸方) 資本金 (Interest, *Dr. to Stock*) という仕訳を通じて自己資本利子 (年6%) が計上されていることである。さらに受取利息に関しても、交互計算勘定・B. F. Foster 以外の2人の組合員私用勘定・マルス号 (船舶 $\frac{1}{2}$ の所有) について計上されている。

元帳にはアルファベット順に索引を付した39の勘定科目が設定されている。すなわち、資本金を筆頭に損益集合・利息 (混合勘定)・受取手数料・保険料・営業費・現金・受取手形・支払手形・委託販売諸掛 (委託販売勘定へ振り替えられて消滅する中間勘定)・委託販売・ニューオーリンズ向冒険事業・ロッテルダム向冒険事業・大麻組合売買・藍組合売買・綿花・商品・マルス号 (船舶 $\frac{1}{2}$ の所有)・3つの組合員私用・17の債権と債務を示す人名 (委託販売と受託販売によるものを含む) と続き、最後が残高勘定になっている。また、第1セットの場合と同様、決算前合計試算表・損益表・残高表も付されている。

各種損益勘定の損益集合勘定への振替と各種資産勘定・負債勘定の残高勘定への振替は、第1セットの場合と異なり、仕訳帳における仕訳を経由して転記されているが、いずれも個別的に相手勘定を記すことなく諸口 (To or By Sundries) で示されている (*Double Entry*..., 7th ed., pp. 128, 129, 140でも同様)。ただし、私用勘定と損益集合勘定の資本金勘定への振替ならびに資本金勘定の残高勘定への振替は仕訳帳における仕訳を経由していない。いま、

上述したことを理解してもらうために資本金・損益集合・利息・残高の各勘定を示せば次のとおりである (pp. 165, 174)。<sup>(20)</sup>

Dr.		Stock.		Cr.		1
1836				1836		
Dec.31	To Balance, . . . . .	12	17,422 81	July. 1	By Cash, . . . . .	1 14,400 00
				Dec.31	By Interest, . . . . .	11 432 00
				31	By Profit and Loss, . . . . .	12 2,590 81
			17,422 81			17,422 81

Dr.		PROFIT AND LOSS.		Cr.		
1836				1836		
Dec.31	To Sundries, . . . . .	12	675 53	Sept.30	By Indigo in Co. . . . .	4 242 16
31	To Stock, . . . . .		2,590 81	Dec.31	By Sundries, . . . . .	12 3,024 18
			3,266 34			3,266 34

Dr.		INTEREST.		Cr.		
1836				1836		
Dec.20	To Cash, . . . . .	9	26 96	Aug.20	By Cash, . . . . .	1 7 22
31	To Stock, . . . . .	11	432 00	Sept.30	By Indigo in Co. . . . .	4 20 86
31	To Profit and Loss, . . . . .	12	57 89	Dec. 2	By Cash, . . . . .	9 51 84
			516 85	1	By J.Ramsay, . . . . .	10 36 24
				24	By J.Thompson, . . . . .	10 242 36
				31	By Sales Consignm'ts, . . . . .	10 39 47
				31	By Sundries, . . . . .	11 75 24
				31	By Sundries, . . . . .	11 43 62
						516 85

(20) ただし、資本金勘定の仕丁欄12（借方側と貸方側）と残高勘定の仕丁欄1（おそらく12の間違いであろう）の記入は仕訳帳を経由しておらず、上述した説明と矛盾している。

Dr.		BALANCE.				Cr.	
1836				1836			
Dec.31	To Sundries. . . . .	12	21,789 69	Dec.31	By Sundries, . . . . .	12	4,366 88
				31	By Stock, . . . . .	1	17,422 81
			21,789 69				21,789 69

Foster は、上述した2つの記帳例題を示したあと、改良仕訳帳 (Improved Journal) と称して、貸借双方にそれぞれ商品・現金・諸口の3欄を有する多欄式仕訳帳を掲げ、第1セットの取引例題に基づく記帳を示している。<sup>(2)</sup> “この方法は、いまや多くの大規模商業によって採用されている”と彼は述べ、また“書籍商・卸売商・小売商のごとく、同種記入が頻発する事業に適用される”(p. 182)としている。いま、その第1頁を示せば次のとおりである(p. 183)。いうまでもなく商品・現金は月次合計で元帳転記がなされ、諸口に関しては個別転記がなされている。

(2) すでに W. Mitchell の簿記書 (1796) および L. Preston の簿記書 (1848・1851) が多欄式仕訳帳を説明しており、J. Bennet(t) の簿記書 (1820・1821・1842) がその萌芽を示していることについては、2編の前掲拙稿を参照されたい。

IMPROVED JOURNAL.

— Drs.—			BOSTON, January 1, 1836.				— Crs.—		
Mdze.	Cash.	Sundries.		Sundries.	Cash.	Mdze.			
	5,000 00	” ”	CASH, <i>Dr. to Stock</i> , For capital in trade, . . . . .	5,000 00					
			1						
1,895 63	” ”	” ”	MERCHANDISE, <i>Dr. to J. Andrews &amp; Co.</i> Bought, as P Invoice, . . . . .	1,895 63					
			5						
		4,800 00	COMMERCIAL BANK, <i>Dr. to Cash</i> , Deposited this day, . . . . .	” ”	4,800 00				
			8						
		105 50	AARON BROWN, <i>Dr. to Merchandise</i> , 14 yds. Cloth, . @ 3 25, . . . 45 50* 8 ” do. . @ 7 50, . . . 60 33	” ”	” ”	105 50			
			15						
		895 63	J. ANDREWS & Co. <i>Dr. to Bills Payable</i> , For No. 1, due March 15, . . . . .	895 63					
			30						
		105 50	BILLS RECEIVABLE, <i>Dr. to A. Brown</i> , For No. 1, due March 1, . . . . .	105 50					
			”						
	187 58	” ”	CASH, <i>Dr. to Merchandise</i> , For Cash Sales this month, . . . . .	” ”	” ”	187 58			
			”						
		45 37	CHARGES, <i>Dr. to Cash</i> , Paid this month, . . . . .	” ”	45 37				
			— Monthly totals —						
1,895 63	5,187 58	5,952 00	••••• Sundries, . . . . .	7,896 76	4,845 37	293 08			
		5,187 58	••••• Cash, . . . . .	4,845 37					
		1,895 63	••••• Merchandise, . . . . .	293 08					
		13,035 21	••••• Proof, . . . . .	13,035 21					
			— February 2, 1836. —						
		450 00	J. ANDREWS & Co. <i>Dr. to Cash</i> , Paid them on account, . . . . .	” ”	450 00				
			2						
		36 06	CHARLES DRUMMOND, <i>Dr. to Merchandise</i> , 8 yds. Cassimere, @ 2 75, 22 00 1 $\frac{7}{8}$ ” Bro. Cloth, @ 7 50, 14 06	” ”	” ”	36 06			
			4						
		120 00	B. CANFIELD, <i>Dr. to Merchandise</i> , 48 yds. Cassimere, . . @ 2 50, . . . . .	” ”	” ”	120 00			
			6						
1,575 88	” ”	” ”	MERCHANDISE, <i>Dr. to D. Evans</i> , For amount his Invoice, . . . . .	1,575 88					
			9						
		62 00	B. CANFIELD, <i>Dr. to Merchandise</i> , 62 yds. Toilnette, . . @ 1 00, . . . . .	” ”	” ”	62 00			
1,575 88	” ”	668 06	— Amounts forward. —	1,575 88	450 00	218 06			

\* 6000のミスプリントであろう (久野注)。



## § 3 T. Jones の簿記書

著者は会計士の経験を有し、Foster と同様、ニューヨーク商業学校に奉職<sup>(2)</sup>し、本書執筆当時その校長をつとめていた。本書の冒頭には、J.H. Shepherd を筆頭に個人・団体・学生たちからの本書に対する書簡形式の賛辞とともに、商業学校の趣意書が掲載されており、そのあと次のような構成に基づいて執筆されている。第4章までが原理編であり、第5章以降がその応用編ということになるが、Jones 簿記論の優れた特徴は前者に見られる。

序文 (pp. i-iii)

簿記の研究に関する予備的留意事項 (pp. iv-xvi)

第1章 簿記の理論——整理の問題 (pp. 17-31)

第2章 一般原則——元帳の記帳練習 (pp.32-45)

第3章 貸借の均衡——勘定の締切、新勘定の開設、試算表、2組の勘定の均衡、改良型試算表、残高表 (pp. 46-57)

第4章 取引の分解——仕訳、転記 (pp. 58-70)

第5章 受託販売、組合売買 (pp. 71-85)

第6章 取引例題、組合事業の形成 (pp. 86-104)

第7章 実践的様式——現金出納帳、当座帳、元帳 (pp. 105-130)

第8章 補助簿——月次仕訳 (pp. 131-142)

第9章 勘定の開設と締切に関する一般的留意事項、組合事業の清算、簡便法の併用、合計仕訳 (pp. 143-160)

著者は、まず序文において、“知識というものは、同一の普遍的真理に関連する事象を統合しうる度合に応じて集積されるのであり、多くの場合、それらの原則は個別事象のなかに混合してしまっているのです、それらを整理するためには多年の努力が必要である” (p. i) と述べ、さらに“当初の研究において、個別事象から原則を抽出せんとし、かつ科学の名に値する普遍的・理論的秩序を見い出そうとして、著者はまったく孤立無援であり、先駆者たちの業績から得

<sup>(2)</sup> *The Science of Double-Entry Book-Keeping*,... (N. Y. : W. B. Harkness, 1840), pp. 216(22 $\frac{1}{2}$ cm) の著者。

るところは皆無にひとしかつたのであり、この点で著者の仕事が並大抵の困難ではないことを知った” (p. iii) と述懐している。

かかる Jones の努力は、後述するとおり、従来の経験律 (rule of thumb) に依拠する仕訳接近法に代えて論理的な元帳勘定接近法を産み出したのであるが、その努力の成果は自分の弟子たち——たとえば Nicholas Harris<sup>(23)</sup> や Foster によって本書の公刊以前に発表されてしまったのである。彼は、その剽窃を非常に不快に感じ、Foster から彼へ宛てられた次のような書簡を掲載している (p. v)<sup>(24)</sup>。Jones の簿記理論の特徴を知ることができると同時に、Foster の業績が Jones にその多くを負っていることが理解されるであろう。

ニューヨーク, 1838年8月1日

Thomas Jones 殿

拜啓：小生が「貴殿の」簿記教授法であると理解している主要な特徴、したがって私見では貴殿がその創始者たる榮譽をにやうものは次のとおりであります。

第1 理論の説明を元帳から始めること。

第2 各個別勘定の大要を説明し、その利用を示すこと。

第3 各種勘定から推論して商人の財政状態に関する2つの計算書を作成し、それぞれ商人の正味財産額を示すこと。

第4 複式記入による元帳は、貴殿が……(いまや第1次勘定・第2次勘定)と称する2組の勘定を有し、各組の勘定がそれぞれ商人の財政状態を示す計算書をつくり、かつ商人の正味財産額を示すこと。(第1次)勘定……の結果と(第2次)勘定……の結果の一致によって決算が終了すること。

第5 一連の元帳練習帳で生徒に実践させることによって上記の知識を確認し、そ

(23) Bentley and Leonard, *op. cit.*, pp. 22, 23, 24によれば、下記の2つの著書がある。

*A Complete System of Practical Book-keeping*…(Hartford: Brown & Persons, 1838), pp. 222+[2](23½cm).

*First Lessons in Book-keeping*;…(Hartford: Brown & Persons, 1841), pp. 104(22½cm).

(24) *Bookkeeping*…の巻末にも掲載されているが、同書の巻末によれば、さらに James Nixon, *The Rudiments of Book-keeping*;…(N. Y.: F. J. Huntington & Mason Bros., 1854), pp. 167(18½cm) は Foster の模倣であるという。なお、同上の書簡は、Littleton, *Accounting Evolution*…, pp. 181, 182でも引用されている。

れによってどのような元帳からでもその成果を引き出す方法を生徒に学習させること。

第6 生徒に日記帳の諸取引から未記入の元帳の各欄へ記入させ、それによって仕訳帳がなくても元帳を作成する方法を学習させること。

小生が知るかぎり、この複式簿記に関する特異な教授方法は貴殿の創始になるものであり、その効用と意義を強調しているのも貴殿に依拠しています。

小生は、the “Merchant’s Manual” と題する小生の近刊本の編集にあたって、貴殿の講義から得た知識を利用しましたが、簿記の原則に関連する第11章の元帳の説明に関して、その謝辞は本書の次の版でなすことにし、この版では不注意にも省略してしまいました。

敬 具

B.F. Foster

第1章では、“簿記の理論は財務取引を記録・整理するもっとも簡単で、もっとも分りやすい方法を教えるものである” (p. 17) と述べ、組織的簿記の理論が純粹に分類・整理の問題であるとして、元帳人名勘定の記入方法を例示したあと、勘定への貸借記入に関する伝統的な擬人法を次のように鋭く批判している (pp. 20, 21, 55の脚注; *Bookkeeping*..., 序文, pp. iii, iv)。

しかし、借方のすべてが債権額ではなく、また貸方のすべてが債務額でもない。ある借方項目は債権であり、他の借方項目 (資本金) は引出額である。ある借方項目 (商品) は支払額であり、他の借方項目 (現金) は受取額である。貸方項目もまた同様に異なった事実を示す。こうして、借方・貸方の用語が恣意的に用いられていることは明らかである。借方・貸方の用語を一義的な債権・債務の関係で表示しようとすることは、必然的に曖昧な言葉を使用することになるか、さもなければ、実体をもたないばかりでなく、その債権・債務がわれわれの達成目的に明確な関連をもたない事物までも擬人化してしまうことになる。勘定のいずれかの側を指示する名称としてはそれなりに目的にかなっている。そうだとすると、青欄 (blue column) と赤欄 (red column) という言葉を用いても、それが慣習として容認されるかぎり、同様に間にあるのである。借方・貸方の用語は人名勘定については文字どおりの意義を有しており、これが比喩によってその他の全勘定へ拡張されてきたのである。しかし、この比喩の構成関係は、学生の指導に用いるには曖昧でありすぎ、その課題を解明するよりも神秘化してしまうことになる。

かくして、Jones は、次の2つの命題を通じて、第1次勘定 (primary accounts) と第2次勘定 (secondary accounts) とからなる2勘定系統理論を展開するのである (p. 21; *Bookkeeping*..., pp. 28, 39-41; "Analysis...", pp. 35-42を参照)。

#### 命題 I (PROPOSITION I)

特定時点における資産 (Resources) と負債 (Liabilities) を確定することができれば、それらの比較を通じて当該時点の財政状態が決定される。…… (以下、数値例など10行省略——筆者)

#### 命題 II (PROPOSITION II)

期首の財政状態を決定し、かつ当該期間の損益 (Gains and Losses) を決定できれば、それによって期末の財政状態を決定することができる。…… (以下、数値例など11行省略——筆者)

かくして、この2つの分離・独立した命題を正当に考察しうるような方法で、それぞれの命題の諸条件を充足させれば、必然的に同一の結果を導くことになる。されば複式記入 (Double Entry) は、事業に生起した諸事実を整理する2つの異なった方法を有しており、それぞれの方法は、別個の勘定系統 (a distinct set of accounts) を持っている。すなわち、一方の勘定系統は第1命題の諸条件を充足し、他方の勘定系統は第2命題の諸条件を充足する。そして、両者の結果の一致は、いわゆる「決算 (the balance of books)」を構成するのである。

上の引用から明らかなおおり、第1命題は (期末)資産 - (期末)負債 = (期末)資本 という資本等式を示すパラダイムであり、第2命題は (期首)資本 ± (期間)損益 = (期末)資本 という会計等式を示すパラダイムであって、両者は必然的に均衡する。そして、第1命題に関連する現金・受取手形・支払手形・人名の諸勘定が第1次勘定系統に属し、また第2命題に関連する他の全勘定が第2次勘定系統に属することになる。<sup>(25)</sup>したがって、この Jones の勘定理論によれば、各種の損益勘定はもちろん資本金勘定や商品・船舶などの資産勘定も第2次勘定に属することになる。それは、かならずしも現代の实在勘定

(25) *Paradoxes*...においては、それぞれ財務系統 (financial department) と営業系統 (business department) と称されているという。Littleton, *Accounting Evolution*..., p. 177を参照。

・名目勘定という基本財務諸表に関連した勘定分類とは同一でないにしても、それと一脈相通ずるものがあることを認めうるであろう。<sup>(26)</sup>

Jones は、先の引用に続いて、第1次勘定・第2次勘定に属する諸勘定について、その記入方法と残高の意味を個別的に解説したあと、2つの勘定系統に分けて、それぞれ具体的な元帳勘定で数値例を示している。なお、その数値例では、現金・受取手形など彼が固定財産 (fixed property) と称する資産と区別して、彼が変動財産 (floating property) と称する商品や船舶などに関し、それらがすべて売却された場合と一部売れ残った場合とに分けて、説明がなされている。後者の場合、売残財産の評価は判断もしくは見積の問題であるとして、時価が採用されている (pp. xv, xvi, 31, Chap. 2 の練習問題; "Analysis...", p. 37を参照)。

第2章では、第1章の一般原則を具体的に理解させるため、まず元帳勘定を第1次勘定と第2次勘定とに分けて記帳練習をさせ、かつ前者から資産負債表 (Resources and Liabilities) を、後者から損益表 (Profit and Loss) を作成させるべく、8つの練習問題を掲げている。すなわち、一般原則に基づく徹底した記帳練習である。

第3章では、貸借の均衡性は複式簿記の基本的特質であるとしながらも、それは先に説明した二重の分類整理、すなわち2組の勘定系統の帰結によるものであるとしている。まず第1次勘定系統は現金勘定だけに限定して第2次勘定系統との均衡関係を説明したあと、さらに信用の導入にともなう受取手形・支払手形・人名の諸勘定をも含めた第1次勘定系統と第2次勘定系統との均衡関係を説明し、資本等式を前提にして固定財産はすべて現金の変形にすぎないという観点から、第1次勘定への借方記入はすべて固定財産の増加であり、その貸方記入はすべて減少であると述べている (p. 48)。ここにおいて、われわれは

(26) Littleton, *Accounting Evolution...*, p. 175では次のように評価している。  
 “もし誰かが「実在」・「名目」という術語を普及させないでいたならば、おそらく「第1次」・「第2次」という方が術語としても使用しやすかったであろう。彼は、たしかにこの2勘定系統の明確な区別が、組織的簿記にとって不可欠であると考えた結果、相互対立をはっきりさせる術語を慎重に選んだに違いない。現在の術語がこの術語にまさるとも思えない。”

彼が貨幣系統と給付系統とからなる素朴な2勘定系統理論を展開していることを知るのである。<sup>(27)</sup>

ついで、第1次勘定と第2次勘定につき、それぞれ締切(To or By New Account)と開始(To or By Old Account)の記入方法を例示したあと、記帳の正確性確認手段として決算前残高試算表の作成を説いている。しかし、彼は試算表の作成を記帳の正確性確認手段に限定して考えているのではなく、次の引用からも明らかなおとおり、積極的に経営状況の理解のための資料ともみなしている(p. 56)。

多くの事業では試算表を月ごとに作成するのが慣行になっている。しかし、年に2回以上も棚卸の労をとることは稀であり、その作成は転記の均衡性検証以外のなにもでもない。しかし、われわれは、試算表が商人へ経営状況に関する重要な情報を提供しうるよう示すことを目論んでいるのである。

ここで、Jones が推奨する改良型試算表と残高表および損益表を掲示すれば次のとおりであるが、かかる計算書の作成に関して、“若い読者に銘記して

IMPROVED FORM OF TRIAL BALANCE

RESULTS.	DEBIT BALANCES.			CREDIT BALANCES.		RESULTS
	18,700	89	Cash,			
	16,241	02	Bills Receivable,			
			Bills Payable,	20,250	00	
			Joseph Steele,	4,974	29	
			James Kelly,	5,333	33	
			William Brown,	3,000	00	
		774	James King,			
		50	Peter Hawes,			
36,616	41	900	James Wilson,	1,500	00	35,057
						62
			Merchandise,	8,948	50	
		23,420	Cotton,			
		00	Shipment to London,			
		6,500	Harlem R.R. Stock,			
		00				
		6,000	Charges,			
		00	Interest,			
40,390	00	4,470	Stock,			
		250				
288	06	38				
		06				
				33,288	35	42,236
						85
				\$ 77,294	47	77,294
						47
\$ 77,294	47	77,294				

(27) “Analysis...,” pp. 38, 39では、もっと明確に説明されている。すなわち、(借方)第1次勘定(貸方)第2次勘定というパターンとその逆のパターンである。

RESOURCES.		LIABILITIES.	
Cash, . . . . .	13,300 00	Bills Payable, . . . . .	7,000 00
Bills Receivable, . . . . .	14,000 00	Henry Prince, . . . . .	4,025 00
James Adams, . . . . .	3,000 00	Stock Commencing, \$44,270	
Edward Harrison, . . . . .	3,653 00	Gain, . . . . . 8,015	
Ship Rover, valued at . . . . .	18,000 00	Present net capital . . . . .	52,285 00
Merchandise, . . . . .	11,357 00		
	\$ 63,310 00		\$ 63,310 00

PROFIT AND LOSS.			
To Ledger postings, . . . . .	327 00	By Merchandise, . . . . .	5,592 00
" Shipment to London, . . . . .	87 00	" Ship Rover, . . . . .	4,310 00
" Charges, . . . . .	2,527 00	" Cotton, . . . . .	1,054 00
" Stock, net gain, . . . . .	8,015 00		
	\$ 10,956 00		\$ 10,956 00

おいてもらいたいことは、同じ努力を傾注するのであれば、科学的かつ有能な会計人の顕著な指標は「簡明性(*conciseness*)」と「理解可能性 (*perspicuity*)」ということである」と述べている (pp. 56, 57)。

第4章では、1840年1月1日から同月16日まで、開始記入を含めて具体的な16の取引を掲記し、その分解と元帳への転記を例示している。すでに第2章と第3章で元帳勘定接近法による記帳練習がなされているので、容易に理解されるところである。例示された取引のなかには購入した備品 (*Fixtures*) \$150の営業費 (*charges*) への直接借記 (金額が相対的に小さいので問題はないかもしれない)、貸倒損失の計上 (損益集合勘定への直接借記)、手形の割引 (利息勘定への借記) などがある。ちなみに手形のサイトは30日から60日になっている。元帳では第1次勘定に属する現金・受取手形・支払手形・2つの人名の

諸勘定が設定され、その下には残高表が示されている。他方、第2次勘定に属するものとしては資本金・商品・綿花・ロンドン向積送品・利息・営業費の諸勘定が設定され、その下には損益表が示されている。なお、第2次勘定における各種損益の損益集合勘定への振替、ならびに同勘定から資本金勘定への振替に関しては仕訳を経由せず、直接当該勘定の間でなされており、また新しい日付での前期繰越の手続もなされていない。特筆すべきは残高勘定が設定されていないことであろう。

第5章では、受託販売 (commission business consignment account sales) と組合売買 (speculation in company) の記帳方法について詳論している。前者については、人名を付した受託販売勘定 (第2次勘定に属する) を設定して関連する営業費・保険料・手数料などを振替によって借記すると同時に売上を貸記し、その差額を当該人名勘定へ貸記する方法が述べられている (*Bookkeeping...*, pp. 62-68をも参照)。後者に関しても、組合売買勘定を設定して、ほぼ同様の記帳が行なわれるのであるが、貸記について、もし当方で販売をしなかった場合、自己の純手取額の記入のみがなされる。そして、以上の説明に従って、前章の帳簿記録を引きつぎ、1月17日から同月30日まで、30の一連の取引に関して、仕訳と元帳勘定への記入がなされている。なお、1月24日付で外貨取引——£1,200 sterling があり、その換算は \$ 1 = 4 s. 6 d. になっている (pp. 80, 93の取引例も同様)。

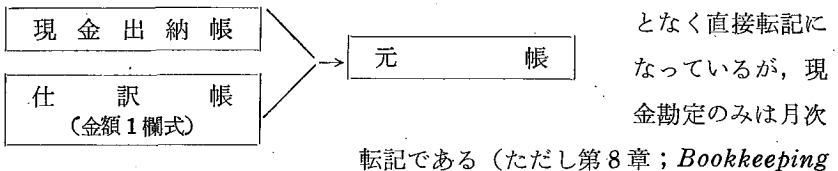
第6章では、2人の組合員 (William Jones と Thomas Jones) からなる組合事業を前提にして、1841年2月1日の開業取引から同年5月30日までの諸取引を日記帳形式で示しているが、“そのもっとも重要な達成目標は、これら諸取引から一定期間の終わりに資産 (Resources) ・負債 (Liabilities) ・利益 (Gains) ・損失 (Losses) に関する計算書を作成する理論を修得することである” (p. 86) という趣旨に依拠している。いうまでもなく、そこには財務諸表作成目的の簿記という理念が明確に打ちだされている。なお、取引の日記帳 (Memorandums of transactions) には仕入帳・現金出納帳・小口現



金出納帳・売上帳などの補助簿への記入関係も明示されている。

注目すべき取引例としては、4月1日、新組合員 (George Jones) の加入にともない、3人の出資額を等分にするため、旧組合事業の資本金 \$40,535.68のうち \$535.68を2人の旧組合員人名勘定の貸方へ振り替え、さらに旧組合事業の受取手形および債権 \$20,372.92に対して6%の貸倒損失 (bad debts) を見込計上するため、新組合員人名勘定への貸方記入 \$407.46と2つの旧組合員人名勘定への \$203.73ずつの借方記入が示されている。

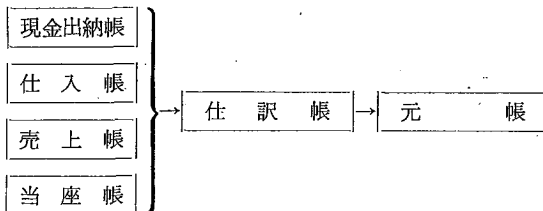
第7章は、前章の取引例題に従って、下記の帳簿組織に基づく記帳例示である (Bookkeeping..., p. 128も同様<sup>28)</sup>)。いうまでもなく、合計仕訳を経由するこ



..., pp. 69-73を参照)。さらに、著者は、現金出納帳の特殊仕訳帳化に関連して、商品や利息についても特別金額欄を設定し、いわゆる多欄化を図ることに言及している (pp. 106-107)。

元帳にアルファベット順の索引を付して設定されている勘定科目は33であるが、そのうち16は人名勘定である。すなわち、第1次勘定として現金を筆頭に受取手形・人名・支払手形・15の人名 (うち3つは組合員) の各勘定をあげ、ついで第2次勘定として資本金を筆頭に損益集合・鉄道会社株式・ロンドン向

② *Bookkeeping*..., pp. 10-25, 74, 75 では次のような標準的帳簿組織を示している。ただし仕訳を説明するまでは仕訳帳を使用しないで元帳勘定へ直接記入している (pp. 46, 47を参照)。



積送品・商品・綿花・営業費・受取手数料・ニューオーリンズ向積送品・利息（混合勘定）・保険料・人名を付した受託販売・ウェイブリ号（船舶）・人名を付した受託販売・砂糖組合売買の各勘定を列挙し、最後に残高表と損益表とが示されている。第4章でも指摘したが、残高勘定が設定されていないことに留意されたい。

第8章では、“補助簿の一般目的は各種の重要な取引系列を詳細に示すことである”（p. 131）と述べ、もっとも一般的に使用される補助簿として次の5つをあげ、それぞれについて記帳例を示している。下記の諸帳簿は当座帳（Day Book）とともに仕訳にとって必要不可欠なものであり、いわば特殊仕訳帳化されるものであるが、さらに必要に応じて交互計算明細帳（Account Current Book）・書類控帳（Letter Book）・注文控帳（Order Book）などの補助簿にも言及している。

1. 現金出納帳（The Cash Book）
2. 手形記入帳（The Bill Book）——受取手形と支払手形を含む
3. 仕入帳（The Invoice Book）
4. 積送品記入帳（The Invoice Book Outwards）
5. 受託販売帳（The Commission Sales Book）

ついで、“現代実践における仕訳帳の主たる目的は各種の貸借項目を月次合計（monthly totals）に集約することである”（p. 136）として、月次仕訳に基づく金額2欄式の仕訳帳を例示している。その最終頁（4頁）は次頁のとおりである（p. 142）。

第9章では、各論のかたちで種々の個別的問題がとりあげられている。いまそれらのうちから注目すべき事項を選んで紹介すれば以下のとおりである。

まず第1に、“勘定締切のための諸記入を仕訳する実務は一般的なものでないが、一定の締切記入の状況を説明するためには、有用な場合もある”と述べ、さらに、“定額資本制による組合事業においては、純利益を損益集合勘定から資本金勘定ではなくて個々の組員勘定の貸方へ振り替えるのが至当である”と

MONTHLY JOURNAL.

MARCH, 1841.

		4		
MERCHANDISE TO BILLS PAYABLE. For purchases this month. 3rd, Bought at Auction on our Note at 30 days, . . . . .		\$ 2,500	00	
15th, " of Charles Mason, on our Acceptance at 2 months, . . . . .		2,800	00	\$ 5,300 00
SUNDRIES TO MERCHANDISE. For sales this month. PETER HAWES, . . . . . 5th, \$ 595.00 JAMES KING, . . . . . 8th, 652.50		1,247	50	
BILLS RECEIVABLE 29th, . . . . .		4,800	00	6,047 50
SUNDRIES TO WALKER & Co's CONSIGNMENT. JAMES KING, . . . . . 8th, 488 75 JAMES HARRISON, . . . . . 11th, 971 75		488	75	
		971	75	1,460 50
BILLS RECEIVABLE TO SUNDRIES. To JAMES KING, . . . . . 10th, 1,141 25 To WALKER & Co's CONSIGN'T, 16th, 3,540 00 To COTTON, . . . . . 25th, 7,500 00		1,141	25	
		3,540	00	
		7,500	00	12,181 25
WALKER & Co's CONSIGNMENT TO SUNDRIES. To COMMISSION, . . . . . 20th, 302 77 To CHARGES, . . . . . " 847 00 To INSURANCE, . . . . . " 150 00 To WALKER & Co. . . . . " 4,755 73		302	77	
		847	00	
		150	00	
		4,755	73	6,055 50
WALKER & Co. to BILLS RECEIVABLE. For Allen & Co's draft on Jones, Lloyd & Co., 22nd,				2,400 00
JAMES KELLY TO SHIPMENT TO LONDON. For net proceeds of Flour per Neptune, 28th,				5,800 00

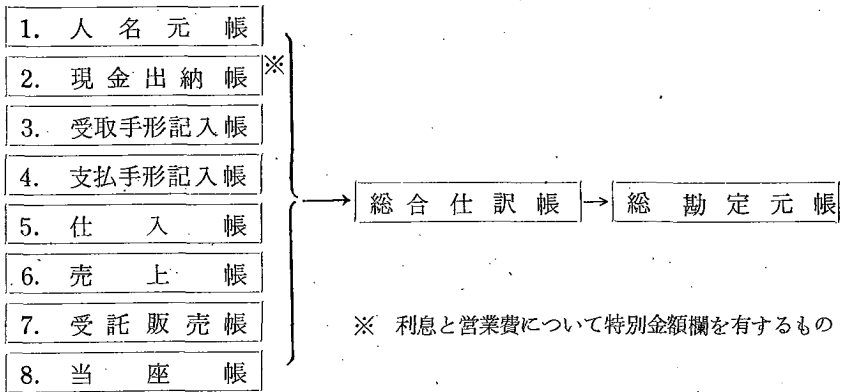
主張している (p. 144)。

次に、組合事業における組合員の死亡もしくは引退にあたって、その清算のために必要な各種調整手続が述べられている。すなわち、各種人名勘定を含む受取勘定および支払勘定に関する経過利息の認識計上や外貨換算手数料とともに、貸倒見積額に対して損益集合勘定への借記と保証基金勘定 (Guarantee Fund) への貸記の手続を説明し、さらに次のように述べている (pp. 145, 146)。

保証基金勘定は、もし締め切るのであれば、“借方新勘定 (To New Account)” というふうに締め切ることになるが、締め切る必要もないであろう。すなわち、当該金額は、勘定の開設にあたって、その記入の労を避けて負債勘定へ繰り越され、従前と同じ状態におかれることになる。

すべて上述した記入を正確に行なえば、残高表は現金価値に基づく評価 (a Cash valuation) で当該事業の当該日付における財政状態を示すことになる。

最後に、大規模商企業を前提にして、記帳労務の節約という観点から、次のような帳簿組織を提案し、かつその場合の総合仕訳帳 (Summary Journal) として次頁の様式のもの示している (pp. 157-159)。



(29) *Ibid.*, pp. 135, 136では Contingent Fund という用語を使用している。また同書では、それに関連して、伝統的な稼得利益 (earned profits) に対して、資産が現金もしくは現金等価物だけからなる実現利益 (realized profits) という概念を区別すべきだと主張している。

## SUMMARY JOURNAL.

JOURNAL, JANUARY 1841.			
SUNDRIES TO SUNDRIES, for postings this month.			
<i>Debits.</i>			
<i>Merchandise</i> . . . . .	per Invoice Book, . . . . .	10,000	00
<i>Consignment Sales</i> . . . . .	for sales closed per Day Book, . . . . .	5,850	00
<i>Bills Receivable</i> . . . . .	per Bills Receivable Book, . . . . .	16,000	00
<i>Bills Payable</i> . . . . .	per Bills Payable Book, . . . . .	5,800	00
<i>Cash</i> . . . . .	per Cash Book, . . . . .	19,000	00
<i>Personal Accounts</i> * . . . . .	total debits per personal Ledger, . . . . .	9,150	00
<i>Charges</i> . . . . .	per Cash Book, . . . . . 2,800		
" . . . . .	per Day Book † . . . . . 1,800	4,600	00
<i>Interest</i> . . . . .	per Cash Book, . . . . . 680		
" . . . . .	per Day Book, . . . . . 340	1,020	00
<i>Profit and Loss</i> . . . . .	per Day Book, . . . . .	784	00
			72,204 00
<i>Credits.</i>			
To <i>Merchandise</i> . . . . .	per Sales Book, . . . . .	22,510	00
To <i>Consignment Sales</i> . . . . .	per Commission Sales Book, . . . . .	11,340	00
To <i>Personal Accounts</i> . . . . .	per Personal Ledger, . . . . .	13,680	00
To <i>Cash</i> . . . . .	per Cash Book, . . . . .	5,000	00
To <i>Bills Payable</i> . . . . .	per Bills Payable Book, . . . . .	9,000	00
To <i>Bills Receivable</i> . . . . .	per Bills Receivable Book, . . . . .	8,790	00
To <i>Charges</i> . . . . .	per Day Book, . . . . .	1,384	00
To <i>Interest</i> . . . . .	per Cash Book, . . . . . 280		
" . . . . .	per Day Book, . . . . . 135	415	00
To <i>Profit and Loss</i> . . . . .	per Day Book, . . . . .	85	00
			72,204 00
* A summary account in General Ledger.			
† There would be a few entries of Charges, Interest, and Profit and Loss, that not being Cash transactions, would necessarily have to be passed through a Day Book.			

## § 4 結 語

以上の考察に基づき、Foster と Jones の2人が同時代の会計人たちよりも優れていた点を要約すれば次のとおりである。

まず第1に、明示的もしくは潜在的に資本主理論 (proprietary theory) に依拠する資本等式を前提にして、科学的勘定理論の確立に貢献したことを特筆しなければならない。<sup>(30)</sup> Foster は、資本金・貨幣・商品・人名という4勘定分類を展開し、他方 Jones は第1次 (財務)・第2次 (営業) という2系統勘定を主張して、ともに従来の人名・実在・名目 (擬制) という非科学的分類を排している。とくに、Jones の場合、商品以外の使用財産をも資本金とともに第2次勘定に含めているという点で若干の問題はあるにしても、現代の実在・名目という2勘定系統の有機的結合による複式簿記体系の説明に一層近づいている。

第2に、帳簿組織に関して、伝統的な3帳簿制から2帳簿制へ進化し、さらに記帳労務の節約という観点から仕訳帳の分割 (複合仕訳帳制) と多欄化の方向を明確に打ちだしている。しかし、それらは彼らの独自の構想に基づくというより、当時の優れた大企業の実務を通じて彼らが導入したものであるという方が正鵠を射ているであろう。

第3に、勘定科目に関しては、やはり人名勘定を中心にした債権・債務の記録が多いけれども、とくに Jones の場合、それまで見られなかった損益勘定重視の姿勢が十分に伺える。残高勘定に関しては、Foster は依然として設定しているけれども、Jones は設定していない。<sup>(31)</sup> Foster は、各種損益勘定の損益集合勘定への振替について、その資本金勘定への振替とともに、仕訳を経由する方法を示しているが、諸口による総括転記になっている。しかし、まだ

(30) M. Chatfield, *A History of Accounting Thought* (Hinsdale, Ill. : The Dryden Press, 1974), pp. 217-230, とくに p. 222 を参照。

(31) T. Turner の簿記書 (1804) も残高勘定を設定していない。前掲拙稿, 「19世紀初頭のアメリカ会計文献」, pp. 23-28 を参照。

両者とも勘定の借方・貸方の摘要欄には旧来の To・By という語を使用している。<sup>(32)</sup>

第4に、会計処理に関しては、両者とも期末財産の時価評価を主張しているほか、Foster は自己資本利子の費用計上を主張し、Jones もまた経過利息の認識計上とともに貸倒引当金の設定手続を説明し、さらに伝統的な稼得利益概念とともに現金基準による実現利益概念をも示していることは特筆に値する。また、両者が家事費その他の私用勘定を損益集合勘定ではなくて資本金勘定へ借記する方法を主張していることは、ようやく会計実体の認識がなされるようになったことの証左であろう。しかし、いまだ減価償却に関する論及はなされていない。

第5に、2人が記帳の対象とした企業組織は、原理を説明する基本例題においては個人企業であるが、その後の具体的記帳例題においては組合企業を前提にしており、むしろ重点は後者におかれていると考えられる。これもまた当時の企業組織の展開過程を反映したものといえよう。しかし、両者とも株式会社については言及していない。

第6に、財務諸表の萌芽として、ともに残高表と損益表が残高勘定および損益集合勘定という元帳勘定から独立して作成されていることに注目しなければならない。とくに残高表に資産・負債という用語が付され、また損益表に損失・利益という用語が付されていることから判断すれば、上述した意図は明確に示されているといえよう。

最後に、しかしもっとも重要なこととして、この2人の会計人の優れた学習指導法を高く評価しなければならない。すなわち、既述した科学的勘定理論に基づいて、伝統的な経験律による仕訳アプローチ<sup>(33)</sup>を排し、積極的に財務諸表→

(32) J. A. Anderson, *op. cit.*, p. 7によれば、かかる形式を1918年頃まで使用していた炭鉱会社もあるという。

(33) たとえば、当時の英・米でひろく読まれていた Thomas Dilworth, *The Young Book-keeper's Assistant* : ... (London : Richard and Henry Custom, 1792) においては、じつに175の仕訳パターンを示しているという。J. A. Anderson, *op. cit.*, pp. 20, 49を参照。

元帳勘定というアプローチを採用し、<sup>(34)</sup>簿記が商人の経営状態を示す財務諸表作成手段であるという目的意識を明確化している。なかんずく、このことは Jones の方が徹底しているが、勘定の貸借記入に関して、両者とも借方・貸方の用語にとらわれず、分類整理・増減記入という説明を通じて簿記の半統計的性格をも浮き彫りにしている。

かくして、われわれはアメリカにおける19世紀前半の先駆的会計人として、はたまた優れた会計教育者として、躊躇することなく Foster と Jones の名をあげることができる。なるほど、Foster は、“どんな知識をも吸収するアメリカ流の、都会化したレオナルド・ダ・ヴィンチ”<sup>(35)</sup>といわれた Benjamin Franklin の名前をラスト・ネームの前に持ちながら、既述したごとく Cronhelm や Jones などの先駆的業績の模倣者もしくは剽窃者 (copycat) だと称されても弁明の余地はないであろう。だがしかし、これを芸術の世界に喩えるならば、Jones は優れた独創性を持った芸術家そのものであり、かつ立派な教育者であったのに対し、Foster は芸術を正當に理解し、その普及に貢献した文芸家であり、同様に立派な教育者であったということができよう。

(34) Littleton, "A Cost Approach to Elementary Bookkeeping," *The Accounting Review*, March 1931, pp. 33-37—*Essays on Accountancy* (Urbana, Ill.: University of Illinois, 1961), pp. 567-575にも要約が収録されている——を参照。

(35) Alistair Cooke, *Alistair Cooke's America* (London: BBC, 1973); 鈴木・桜井共訳、『アメリカ(上)』(日本放送出版協会, 1978), p. 169.